

『BBCワールドサービスとパブリックディプロマシー11
～コスモポリタンな「不偏不党」から
「客観性」の審判員（仲裁員）へ?～』¹
BBC World Service and public diplomacy:
from cosmopolitan “impartiality” to an ‘umpire’ of “objectivity” ?

原 麻里子
Mariko Hara

慶應義塾大学法学部 Faculty of Law, Keio University

要旨…BBCワールドサービスは国際放送局で、長年、英国外務英連邦省の助成金で運営され、英国の利益への奉仕義務と外交政策目的の支持という理解がありながら、コスモポリタンの開放性、公正さと不偏不党という評価が長く続いてきた。勿論、BBCも外務省も「編集権の独立」を謳ってきた。この不偏不党の評価は毎年BBCのために独立機関が行う各種調査で証明されている。その背景には、WSがコスモポリタンな「不偏不党」のニュース提供者から対話重視の公共圏の場を提供しながら、その空間では、グローバルな仲裁員へと変わってきていることがある。その変化には4つの要素がある。1PD政策2WSの歴史3ディアスポラ4ニューメディアの台頭によるメディア倫理の変化である。

キーワード BBC、パブリックディプロマシー、ディアスポラ、アラビア語テレビ放送、不偏不党

1.はじめに

パブリックディプロマシー（以下PD）とは、対外的な政策目標を実現し易くするために、相手国の政府ではなく相手国の国民に働きかけて、国際社会における自国の存在感やイメージを向上させ、自国についての理解を高めていく外交活動のことである。英政府がPD機関として規定するBBCワールドサービス（以下WS）は国際放送局で、英国と諸外国の人々との政治的文化的関係構築に指導的な役割を数十年間担い、常に視聴者への到達度、影響、評価で全てのライバルより良い活動をし、国境を超えてその信頼度は高い。現在、WSは英語と27言語で放送（アラビア語とペルシア語はテレビ放送も）とネットのマルチプラットフォームを用いて情報を発信している。英国には世界で最も効果的で羨ましがられるPD組織が複数あるが、中でもBBCブランドは世界で最も認識度が高いものの一つである。何故、WSは、長年、英国外務英連邦省（以下、外務省）の交付金で運営され、しかも、外務省のPD機関と認定されているにもかかわらず、「不偏不党」であると評価を得るのか。その背景には、WSがコスモポリタンな「不偏不党」のニュース提供者から対話重視の公共圏の場を提供しながら、その空間では、グローバルな仲裁員へと変わってきていることがある。その変化には4つの要素がある。1PD政策2WSの歴史3ディアスポラ、4ニューメディアの台頭によるメディア倫理の変化である。

2. BBCワールドサービス

BBCWSはBBCニュース部門のワールドサービス・グループに所属し、2013年6月の発表では、WSは全世界で2億5600万人に情報を伝えており²、英国内ではインターネットラジオで24時間情報を提供し、夜中にBBCラジオ4の周波数で放送している。

WSは「王室特許状」（Royal Charter）の下で運営され、トラストへの説明義務がある。WSは独立した編集権を有するが、外務省との関係は「BBC協定書」³と3年毎に締結される「外務省・BBCワールドサービス間協定書」⁴に規定される。そして、同協定書に英国政府策定の「戦略的国際優先事項」がWSの目的を定めることを記している。毎年、WSはその3年間計画を外務省と見直すことで合意している。WSの目的は外務担当国務相と合意され、中期優先地域は地理的・視聴者層によって定められる。王室特許状と協定書は、BBCの政府からの独立を保障する重要な文書で、基本法規である特許状で独立性を保障し、協定書はそれを両者の間で確認するという性格である。

WSは、2013年度末まで外務省からの交付金で運営されてきたが、2014年4月1日、BBCと英国政府の協定書に基づいて受信許可料で運営されるようになった。2014-5度の予算は2億4500万ポンド以上である。それに合わせてBBC

トラストは、BBCワールドサービスのための「オペレーティング・ライセンス」を発効させ、WSの権限、業務範囲、予算、主たる目的を設定している。トラストが定期的にこのライセンスに基づいてWSを評価する。

WSのジャーナリズムは「英国のジャーナリズムと同じ価値観（正確さ、不偏不党編集権の独立）を共有すべきである」⁵ WSは正確で不偏不党な独立したニュースサービスを提供し、地球市民の身分を共有することを奨励し、視聴者の討議と対話を支援すべきである。その一方で、WSは英国、英国の人々、文化、国民生活を反映すべきであるとされる。

3. パブリックディプロマシー

(1) パブリックディプロマシーの定義

「旧」（20世紀の）PDは一方通行の情報の流れとされ、そこではPDの行為者がメディアを使用し、コミュニケーターと「受け手」の間の双方向のやりとりを限定的にし、特定の短期の目的に焦点をあて続けることによって、メッセージをコントロールする。⁶

しかし、アメリカの同時多発テロ事件によって、旧PDは「新」PDに変わった。新PDは国際的な政治コミュニケーションの主要なパラダイムシフトである。グローバル化と新しいメディアランドスケープは、もはや外務省は外交政策のコミュニケーションにおいて唯一または独占行為者であるとの権利を主張できない。情報は境界線をたやすく超えられるようになり、より多くの行為者が国際的な問題と政治に関与している。外交はパブリックのディベートと利益グループのロビーによって、益々説明責任が求められ、影響を受けるようになっていく。⁷ ジャン・メリッセン（Jan Melissen）は新PDを（1）新しい行為者に動機付けられた外交プラクティスの変換（2）「相互に連絡しあう」外国のパブリックとの関係の増大（3）一方通行の情報の流れから対話と関与へと変容する、としている。⁸ 新PDは対話的、協同的、包括的で、「放送」モデルを壊し、パブリックと双方向性の関係を構築するために、ソーシャルメディアを利用する。⁹

(2) 英のパブリックディプロマシー

1997-8年、ブレア首相は「クールブリタニア」をスローガンに、英国のナショナルブランディングに勢力を注いでいた。しかし、911後、英でも新PDが検討されるようになるが、その引き金は中東であった。2002年、ブレア政権はパブリックディプロマシー戦略委員会（Public Diplomacy Strategic Board）を設立。06年、それが、パブリックディプロマシー委員会（Public Diplomacy Board）に代わり、議長は外務担当国務相、他5人のメンバーの中にはWS局長もオブザーバーとして名前を連ねている。¹⁰ 08年、外務省はPDを戦略的コミュニケーションの一つとみなすようになった。戦略的コミュニケーションとは、「（対象者の）態度と行動を変革するために、彼らをより効果的に理解し、より効果的な方法で彼らと連携を創り出すことによって、（情報を）伝達する体系的なアプローチ」と定義している。¹¹ そして、09年、外務省はPD組織を戦略的コミュニケーションとパブリックディプロマシー・フォーラム（Strategic Communications And Public Diplomacy Forum）に変更した。外務省のPD担当大臣はWSをPDの機関として重視する姿勢を打ち出し、PDが外務省の仕事においてより中心の位置を占めることになった。

しかし、10年に樹立した保守党と自由民主党連立政権の財政縮小で、PDはより安価なデジタルディプロマシーに変わり、¹² WSの運営資金も外務省の助成金から受信許可料に代わり、縮小化してきている。さらに、14年の下院外務委員会のレポートでは、外務省はWSを「ソフト・パワー」の道具とみなしているとしている。¹³

ジョセフ・S・ナイ（Joseph S Nye）は、ソフト・パワーとは、「自国が望む結果を他国も望むようにする力であり、他国を無理やり従わせるのではなく味方につける力」とする¹⁴ として、国際政治の場でソフト・パワーを持ちそうな国々とは問題の捉え方を規定出来る国、主流になっている文化と考え方をその時点で世界の規範になっているものに近い国（現在では自由主義、多元主義、自治が重視されている）、国内的、国際的な価値観と政策によって信頼性が強化されている国という。¹⁵ PDはソフト・パワーの重要な道具の一つである。¹⁶

(3) まとめ

新PD活動には関係を構築しようとする国々の文化と人々の必要とする事物の理解、情報発信、誤った認識の訂正、双方向の対話・交流などの形で、長期間の関係を構築が必要であり、目標とするグループに一方的なメッセージを送るのではなく、双方向的で国際的に共有される考えを提示するのでもなければ効果を発揮しないとされている。新PDは他国における市民社会との関係を構築し、国内外の非政府関係者とのネットワークを促進し、国内とトランスナショナルな公共圏を表象する共通の対話の構築を目的とする。このPDの概念は新しいコミュニケーションテクニックとして使われてきているが、その意図は変わらず、依然として、プロパガンダか、それ以上かかもしれない。¹⁷ BBCWSはPD政策の一貫として、世界中の人々に情報を提供し、開放した討議を行うことで、人々をエンパワーしている。

4. WSの歴史

1932年12月、BBCは英国本土と海外の自治領植民地を結ぶエンパイアサービスを英語を話すディアスポラ向けに開始。この海外放送が多言語による国際放送になった。1938年、アラビア語放送、1941年欧州向けの仏独伊語放送が開始。戦争終了時には全世界へ45言語で放送していた。放送開始当初は受信許可料で運営されていたが、アラビア語放送開始を境に全額外務省からの助成金で賄われるようになった。911後の「イスラム原理主義」の台頭がWSの英国のグローバルな視点の伝播・普及の伝達手段としてのPDのエージェントとしての価値を強化した。結果、東欧語各国語部の閉鎖、アラビア語とペルシア語衛星テレビチャンネルを開始したが、これは、イスラム世界での英国のプレゼンスを高めるという優先事項を反映したものだ。

18

WSはヨーロッパのファシスト、ナチスの反対勢力への奨励によって、市民権に対する地球規模の声として道徳的資格証明書を獲得し、さらに、1930年代の反スターリン主義によって、「民主主義」へのコスモポリタンの声としてのグローバルな権威を得た。そして、第二次世界大戦後、英帝国の多くの植民地が独立し、WSは植民地の過去から開放され、罪悪感なしに、地球規模の不偏不党を主張する声で放送するようになった。¹⁹以上から、WSの育成者は1イタリア、ポルトガル、スペインのファシストとドイツのナチス2スポンサーである外務省と植民地省と編集権の独立を守る戦いである。²⁰そして、長い目で見れば、放送者たちも外務省も「国家の利益」は検閲やプロバガンダによるものではないとした。開始当時から、WSは英国の海外での利益について長期の見解を有していた。それは、コスモポリタンな文化資本と外務英連邦省の行為への不偏不党のイメージである。²¹

5.新しいメディア倫理

元ワールドサービス局長のリチャード・サムブルック (Richard Sambrook) によると、不偏不党と客観性は新聞ジャーナリズムの信頼を得るためにプロの編集の規律を示すジャーナリストの規範として登場し、初期の放送でも規制化によって採択された。20世紀の大半において、これらはニュースジャーナリズムの核心であった。不偏不党は偏見がないことと関連し、客観性は事実と証拠に関する。それらはプロバガンダ、娯楽、フィクションとジャーナリズムを分けるものであった。²²

情報供給が少ないアナログの時代はこうしたプロの規定・規則が質の確保には効果的であった。しかし、現在の情報の多いデジタル時代には情報が少ない時代に創造されたこの規範は疑問を提示されている。パブリックのメディアへの態度、彼らが何を信じるかは急激に変化してきている。より信頼できるメディアが必要とされ²³、多くの人々がこれらの規範は必要ないと言いつている。現在必要されているのは次の点である。1証拠が客観性の核心2多様な意見が不偏不党の核心。多様な意見がなければ、社会は二極化し、多様な意見が合理的な討議に酸素を与える。3透明性(情報源、興味、意図、方法、提携、価値観や実践の規則)が信頼を支援する。昨今、信頼性が落ちてきている。²⁴

WSも競争相手よりはよい評価を受けているが、地球規模と優先順位の高い市場でのパフォーマンスの評価は特に、信頼ある不偏不党のニュースの提供で急激な低下が見られる。²⁵

6.ディアスポラとは

ディアスポラを自己のグループへのアイデンティティを共有するが、自然災害や政治的・経済的要因により「本来の居住地」を離れ遠隔地に一定の居場所を見いだして分離した状態の人間集団と定義する。

WSは英国市民と帝国臣民の「母国」とのディアスポラ内の接触空間として設立され、後に、ディアスポラ間の接触空間として発展した。²⁶WSの各国語プロデューサーのほとんどがディアスポラないしはコスモポリタンである。WSが客観的なニュース制作者という評価を得るには彼らが論争を呼ぶ問題と事実について「ロビイスト」として機能するという組織内文化があったとする声もある。²⁷

また、BBCにおける異文化間の対話はPD政策の一つである。²⁸WSはディアスポラ内の接触空間(例えば、ペルシア人たちの間)とディアスポラ間の接触空間(多様なナショナルな、民族言語的政治宗教的ディアスポラグループ間)がある。ディアスポラ、難民、移動移民グループは英語と外国語のサービスをトランスナショナルな討議討論空間としてオンラインで使用するようになってきた。これらの番組としては、「ハードトーク」と「ハブユアセイ」がある。²⁹

コスモポリタンのエリート、社会的政治的環境において影響力のある人たちが「パブリックディプロマシー」目的の主要ターゲットの視聴者である。そして、グローバルなパブリックは、WSのようなグローバルなニュース組織を通して出現してきたもので、社会的政治的変容のプロセスにおいて触媒作用を演じている。「グローバルな会話」は文化的言語的境界を超える。³⁰批判的なコスモポリタン主義はグローバルな市民社会の出現では欠くことができない。グローバルな市民社会は「グローバルなパブリック」が健全に機能することに依存しているからである。「私達は真実や正義に同意しないかもしれないが、理解は合意と共有の価値を求めない。価値の争いはしばしば事実利益と意味の争いであり、WSは長年、利益とプラクティスと意味の争いをもつグループ間の文化の斡旋仲介をしてきた。」³¹

7. パラドックス

BBCは国内外の報道の編集権独立の維持を自らの理念とするが、これまで、WSの財源を政府に依存することで、国際放送発信の重点地域の選択は政府の外交政策に規制され、財源と編集権の自立性の矛盾を抱えている。しかし、WSはコスモポリタンな開放性、公正さと不偏不党であるという評判が長く続いてきた。³²これは、古典的なメディアのオーナーシップとコントロールの観念には興味深い挑戦である。

WSは「国家の利益」は他の国際放送が従事しているような検閲やプロパガンダと言った種類によるのではないと気づいた。³³そのため、「WSは英国の外交利益はコスモポリタンの文化資本と、外務省関係問題に対して不偏不党のイメージと夢に貢献するという見解をとってきた。勿論、自己利益から自由なコスモポリタン主義はない。しかし、WSは英国の国益をコスモポリタン主義的不偏不党なグローバル・ボイスを正確に示すことで非常に厳格につくってきたのか。³⁴編集権の独立は国際的視聴者の信頼の徽章として受け入れられている。³⁵

8. アラビア語放送

アラブの視聴者間では、視聴者はラジオからテレビに移動し、「テロとの戦い」、イラク侵攻と占領、ハットン委員会報告書、イスラエル軍攻撃で大被害を受けたパレスチナ自治区ガザ地区住民への義援金運動の放送拒否などにより、BBCへの信頼が低下。³⁶湾岸戦争時にはCNNが大きな役割を果たしたが、その後アルジャジーラが誕生し、イラク戦争時にはメディア環境は変化していた。この流れの中で外務省のPD政策により、WSはアラビア語テレビ放送（ATV）をアラブのニュースのメディアスケープの中で、プレゼンスを再主張するために始めた。

ジャスティン・ルイス（Justin Lewis）は、中東ではBBCニュースは「世界を定義する」性格が強いと見られていたという。³⁷それは、サイドの「オリエンタリズム」が指摘するように、西洋が非西洋の「他者」に世界や「他者」の場所を定義するということである。³⁸ここでは、「私達」（英国）と「彼ら」（中東）という言葉で語られている。

ATVは伝統的なBBCのニュースの価値観に沿った視点でニュースを提供すると同時に視聴者参加型で、討議、討論のフォーラムを提供している。アラビア語放送のホサム・エスックソ（Hosam El Sokkari）局長は視聴者も双方向の対話をし、ニュース制作に参加する機会ももつ参加型メディアであることを強調。BBCは討議の立場を取らないとするが、人々がその討議に貢献するのを可能にするという。³⁹そして、「討議のポイント」（特定の問題の討議に視聴者を参加させるフォーラム）は「政治的見解を擁護しない」「視聴者の提供する情報や考えが私たちの作品」と語り、これがBBCアラビア語放送が「世界を再創造する」プロセスだという。⁴⁰

外務省の当局者は、「ATVの開放的な討議は視聴者が私達（英国）と同じ結論になることを目的」としているとし、「彼らの態度を私達にとって利益になるように変える」といっている。エスックソ局長は「世界を変える」といっている。即ち、ATVはアラブの視聴者に世界の見方を教えるのではなく、自らの意見を参画させ、彼らの世の中の見方を変えていくということである。ATVの視聴者参加と討論のフォーラムの提供は混雑するアラブのメディアスケープの中でATVをアピールするためでもあり、これまで見てきたように、これは外務省のPD政策に支持されている。⁴¹

ATVは「国際的な視座」であるとし（Pfaffner 2008）、BBCは不偏不党の立場をとるとしているが、議題決定権を有している。アラビア語放送のタリク・カフラ（Tariq Kafala）現局長は「アラブの春」のときは、アラブ各国のパブリックから放送可能な多くの情報映像が寄せられたという。大事件の発生時、パブリックは放送可能な新しい情報を多く私達に提供する、今は新しい取材はパートナーシップだと語る。寄せられた情報を使うか否かという編集判断がATVの貴重なブランドバリューである。従って、パブリックからの情報提供を公開するには、私達は私達の編集的価値観で貫く必要がある。しかし、真実、正確さ、不偏不党、多様な意見はより広い意見と視座とやりとりすることで強化されると語る。⁴²

ニュースの選択と編集のプロセスの透明性がパブリックの信頼を維持するには重要である。⁴³実際、Marieは、21世紀において、不偏不党を守るとは大きな優先事項である。というのも、ブログや市民ジャーナリズムが様々な声を伝えるが、ジャーナリスティックな倫理を損ないがちであるからだ。⁴⁴

アラブ向けの放送において、PDは戦場になっている。特に、アラブとイスラムの心を掴むために、地球規模の対テロ戦争に必要な意味合いがある。

9. 結論

WSは国際放送局で、長期間に渡り、外務省の助成金で運営され、英国の利益への奉仕義務と外交政策目的の支持という理解がありながら、コスモポリタンの開放性、公正さと不偏不党という評価が長く続いてきた。勿論、BBCも外務省も「編集権の独立」を謳ってきた。この不偏不党の評価は毎年BBCのために独立機関が行う各種調査で証明されている。このパラドックスは英国

以外の人には理解し難い。しかし、ここで見てきたように、WS は、コスモポリタンの不偏不党からグローバルな仲裁員になろうとして、その評価を保ち続けようとしているのかもしれないが、その背景には英国のPD政策、WSの歴史、ディアスポラのスタッフ、そして、スタッフと聴取者で作るディアスポラ間の対話、デジタル時代のメディア倫理の変化がある。しかし、WS がグローバルな仲裁員になろうとはしても、そこには英国のためにというパブリックディプロマシーの意図はあるのである。⁴⁵

この研究は（公）放送文化基金平成24年度助成金（研究課題『パブリック・ディプロマシーと国際放送～英国のパブリック・ディプロマシー機関BBCワールドサービスの考察から～』）によって行われました。ここに謝意を表します。

参考文献

- 1) 柴山哲也 (2011) :BBC戦争報道の苦悩,原麻里子,柴山哲也編著『公共放送BBCの研究』,ミネルヴァ書房所収
- 2) ナイ,ジョセフ・S (2004) 山岡洋一 (訳) 『ソフト・パワー』日本経済新聞社。
- 3) 原麻里子 (2011) :BBCワールドサービス,同掲書所収
- 4) 平野次郎 (2011) :BBC戦争報道,同掲書所収
- 5) BBC Global News, (2013) :*BBC Global News Brand Tracker Wave 3: H2 2013*
- 6) BBC Trust, (2014) :*Operating Licence: BBC World Service*, London: BBC Trust, http://downloads.bbc.co.uk/bbctrust/assets/files/pdf/regulatory_framework/other_activities/wsol/operating_licence.pdf (最終閲覧日 2014年5月2日)
- 7) BBC Trust, (2007) : *BBC Public Purpose Remit/Bringing the UK to the World and the World to the UK*, London: BBC Trust http://www.bbc.co.uk/bbctrust/assets/files/pdf/regulatory_framework/purpose_remits/bringing.pdf (最終閲覧日 2014年5月2日)
- 8) BBC Trust, (2014) *Operating Licence: BBC World Service*, London: BBC Trust http://downloads.bbc.co.uk/bbctrust/assets/files/pdf/regulatory_framework/other_activities/wsol/operating_licence.pdf
- 9) Bird, C. (2008) : *Strategic Communication and Behaviour Change: Lessons from Domestic Policy in Welsh and Fearn* (eds) *Engagement: Public Diplomacy in a Globalised World* London: Foreign & Commonwealth Office.
- 10) Foreign Commonwealth office (2010), Westminster Hall debate : *Effects on Diplomacy of Internet Technologies*, 22 December 2010 <https://www.gov.uk/government/speeches/westminster-hall-debate-effects-on-diplomacy-of-internet-technologies> (最終閲覧日 2014年5月6日)
- 11) Gillespie, M. & Webb, A. (2012) : *Corporate Cosmopolitanism: Diasporas and Diplomacy at the BBC World Service 1932-2012*, in *Diasporas and Diplomacy: Cosmopolitan contact zones at the BBC World Service (1932-2012)* ed. Gillespie, M. & Webb, A., Abingdon & NY: Routledge.
- 12) Gillespie, M. & Baumann, G. : *Diasporic Contact Zones at the BBC World Service*, http://www.open.ac.uk/socialsciences/diasporas/publications/diasporic_contact_zones.pdf (最終閲覧日 2014年5月2日)
- 13) Hayton, B., (2007) : *Manufacturing consensus and telling stories: Producing news in the broadcast media* in *International broadcasting, public diplomacy and cultural exchange: An international conference to evaluate 75 years of the British overseas broadcasting paper abstracts* (最終閲覧日 2009年6月2日)
- 14) Hill, A. & Alshar, A., (2010) : *BBC Arabic TV: Participation and the Question of Public Diplomacy*, in *Middle East Journal of Culture and Communication* 3 (2010) 152-170
- 15) House of Commons Foreign Affairs Committee, (2014) : *The future of the BBC World Service Ninth Report of Session 2013-14 Report, together with formal minutes relating to the report* Ordered by the House of Commons to be printed 26 March 2014 HC1045
- 16) Lewis, J., (2003) : *The Absence of Narrative: boredom and the residual power of television news*, in Miller, Toby ed. *Television: critical concepts in media and cultural studies - Volume II*, London: Routledge.
- 17) Milissen, J., (2007/2005) : *The new public diplomacy: between theory and practice* in Milissen, J. (ed) *The new public diplomacy: soft power in international relations* Hampshire & NY: Palgrave Macmillan.
- 18) Pamment, J., (2013) : *New Public Diplomacy in the 21st century: a comparative study of policy and practice*, Oxford: Routledge.
- 19) Pfaffner, E., (2008) : *BBC to introduce channel in Arabic*, *International Herald Tribune*, 3 March,
- 20) Said, E. W., (1978/2003) : *Orientalism*, London, NY, Cumberwell, Toronto, New Delhi, Auckland, Rosebank: Penguin Books
- 21) Sambrook, R., (2005) : *'Citizen Journalism and the BBC'* in *Neman Foundation for Journalism at Harvard*, <http://www.neman.harvard.edu/reports/article/100542/Citizen-Journalism-and-the-BBC.aspx> (最終閲覧日 2014年5月1日)
- 22) Sambrook, R., (2012) : *Delivering Trust: Impartiality and Objectivity in the Digital Age* *Delivering Trust: Impartiality and Objectivity in the Digital Age*, http://ocw.ac.uk/33772/1/Delivering_Trust_Impartiality_and_Objectivity_in_a_Digital_Age.pdf (最終閲覧日 2014年5月1日)
- 23) Zahama, R.S. (2008) : *Mapping out a Spectrum of Public Diplomacy Initiative: Information, and Relational Communication Frameworks*, pp85-111 in Snow, N. and

24) Taylor, P.M. (eds.) *Routledge Handbook of Public Diplomacy*; London and NY: Routledge

¹ 「Umpire」の和訳は「仲裁員」の方が「審判員」よりも相応しいので訂正する。

² <http://www.bbc.co.uk/mediacentre/latestnews/2013/global-audience-estimate.html>

³ The Agreement between Her Majesty's Secretary of State for Culture, Media and Sport and the British Broadcasting Corporation (July 2006)

http://www.bbc.co.uk/bbcust/assets/files/pdf/regulatory_framework/charter_agreement/bbca_agreement_july06.pdf

⁴ Broadcasting agreement for the provision of the BBC World Service http://downloads.bbc.co.uk/worldservice/WS_Broadcasting_Agreement02FINAL.pdf

⁵ BBC Trust, 2007: 1

⁶ Zahama, 2008: 88-89

⁷ Pamment, 2013: 3

⁸ Melissen, 2005: 17-19

⁹ Pamment, 2013: 3

¹⁰ 原, 2011: 266-67

¹¹ *Ibid.* 2008: 108

¹² Foreign Commonwealth office

¹³ House of Commons Foreign Affairs Committee, 2014

¹⁴ ナイ, 2004: 26

¹⁵ *Ibid.*, p63

¹⁶ Melissen, 2007: 4

¹⁷ Pamment, 2013: 136

18 当時の経緯については原 (2006) .

¹⁹ WS の歴史については原 (2011: 267-71) を参照

²⁰ 柴山 (2011) , 平野 (2011)

²¹ Gillespie & Baumann, 12-13

²² Sambrook 2012: 3

²³ *Ibid.*, 3

²⁴ *Ibid.*, 39-40

²⁵ BBC Trust 2014: 9, BBC Global News (2013)

²⁶ Marie Gillespie and Gerd Baumann: 22 Marie Gillespie and Alban Webb 2012: 8

²⁷ Hayton 2007: p6

²⁸ 原 2011: 278-83

²⁹ 原 2011: 278-83

³⁰ Gillespie & Baumann, 8

³¹ Gillespie & Baumann, 13

³² BBC Global News (2013)

³³ 原, 2011: 267-270

³⁴ Gillespie & Gerd Baumann, 13

³⁵ Speech by Sir Michael Lyons, Chairman of the BBC Trust, to Sweden's Public Service Day, http://www.bbc.co.uk/bbcust/news/speeches/2011/global_mission.html (最終閲覧日 2014年5月1日)

³⁶ BBC Global News (2013)

³⁷ *Justin* 2003: 336

³⁸ *Said* 2003: 72

³⁹ 2009年3月17日、アラビア語放送局局長 Hosam El Sokkani 氏インタビュー

⁴⁰ Setting the Arab news agenda conference, SOAS, May 2008, Hill & Alshaer: 2010: 2

⁴¹ Hill & Alshaer 2010: 152

⁴² 2014年9月24日 BBC ワールドサービスアラビア語放送局局長 Tanik Kafala 氏インタビュー

⁴³ Sambrook 2005: 4

⁴⁴ Gillespie & Baumann, 22

⁴⁵ Pamment, 2013: 136